

耳が聞こえない人の暮らしを、ご本人からうかがって知ったこと、考えたこと

恥ずかしい話ですが、この講義を受けるまで、私は間違った考えをいくつも持っていました。たとえば、聴覚障害者はみんな手話を使えて、手話によって会話が可能と捉えていたことです。医療者であるにも関わらず、障害を持っている人のことをこんなに知らなかったなんてと恥ずかしく思いました。そして、医療者であっても知らないことが多い現状に愕然としました。

手話は一つの言語だったのですね。

「ことば」そして「社会」、ろう者の方々は日々このような壁に直面しながら生活しておられる。聞こえる人と聞こえない人との間のコミュニケーションが、大切なものにもかかわらず、こんなにも不足していたのかと感じました。これらの壁をなくすために、手話通訳などが充実していく必要があるとしみじみ思いました。

私は毎日新生児や乳幼児をみているので、人は生まれた瞬間から周りの音を聞いて、新生児期から母親などの人の声を認識し様々な音の刺激を受けながら脳が発達し「言語」を学んでいくことを知っています。しかし音が聞こえない子どもは、「音」だけでなく「ことば」を耳から聞くことができないため、「言語」の習得をすることの難しい、と今日初めて考えるきっかけとなりました。

先日聴覚に障害を持った産婦さんを受け持ちました。彼女は自分が聴覚障害者であることを周囲の人に明かしておらず、私自身も認識していませんでした。彼女は手話ができないため相手の口元や表情を見て会話の内容や相手の感情を読み取っているのだと教えてくれました。

聴覚障害者は見た目ではわからないために普通の人として認識される、聴覚障害者だから手話ができると認識されてしまう等、様々な面で社会から誤解され、生活のしづらさを感じているのだと感じました。

今回の講義を聞いて障害者権利条約の思想は医学モデルを排し社会モデルを採用していること。にもかかわらず、いまだ医学モデル的な考え方が根付いており、社会的障壁が大きく残っていることも知りました。

制度を変えるだけではなく、今回の授業のように、障害のある方々の実際の声に耳を傾けて、聞こえる人も聞こえない人も共に生きる社会を構築していかなければならないと思いました。

この度は貴重なお話をありがとうございました。

今後ご指導宜しくお願い致します。